



第260號 (第 23 卷)

(昭和18年) 第 2 號

卷頭

隨筆

“中原君が新星發見のことなど”

Discovery of Nova Puppis 1942, & etc.

山 本 一 清 *Issei Yamamoto.*

長崎にゐる本會員中原千秋氏がすばらしい新星を發見した。去る十一月11日の早曉のことである。突然のことで、初めの間は詳しい事情が判らなかつたが、まもなく、同君から通信もあり、又、觀測日記を送つて來たので、萬事が判明した。——この日記を見て驚いたことは、同君が昭和14年八月頃からずつと新星發見のため精進してゐたといふ事實である。一體、アマチュア天文家が學界に名を擧げる近道は、彗星の發見と新星の發見とであるが、彗星については、第18世紀の頃（小型の望遠鏡が一般者の手に容易に入るやうになつた頃）から歐米に熱心家が澤山現はれて、新發見を競つたため、多くの彗星が發見されたと共に、ポン、メシエ、ハーシュル（嬢）等の名が廣く知られ、近年にもテンペル、プロルゼン、ジャコビーニ、ネウイミン、バーナード、ラルフ、ボレリ等の名が有名となつてゐる。ところが、新星の發見については、今日まで、悉く偶然の發見であつて、特に新星發見のために専心に努力したといふ人は無い。尤も、ピケリング等の學者たちが一般のアマチュアに新星の發見を協力させようとして、すいぶん獎勵したけれど、今日までは、誰も之を實行するものはなかつた。従つて、わが中原君が、組織的に新星の搜索をした世界最初の人と思はれるのだが、この努力の甲斐あつて、搜索開始以來、滿3ケ年餘にして、今回の大功績を擧げることが出來たのは、實に慶賀の至りである。

こんどの新星の位置はアルゴ船の艫座であつて、天の河の中央部であるから、理論上から言へば、この新星は正に現はれるべき場所に現はれたとも言へるけれど、しかし、今までの例から言ふと、新星が最も多く出る天の河は、白鳥から蛇使ひ、射手あたり、つまりアルゴ船の正反對の方向の天空であつたのだから、こんどの艫座の新星は可なり珍らしがられて宜い星である。しかも、極大光度が0等級にも昇つたのであるから、地球からの距離は比較的に近いものか

とも思はれる。勿論、距離のことは、今後の研究によつて知れて来るものであるが。

中原君は變星の觀測には多少の経験があるらしいし、尙、日記を見ると、今まで2ケ年餘りの間にも、變光星を二つ三つ注意してゐるやうである。例へば、ヘルクレス座の新星を1940年にも度々見てゐるし、又、今年十月頃から、鷲71番星、大犬15番星、ペルセウス座の9番星あたり、カシオペア座の星々、鶴の星座、ペガソス座の ϵ 、 δ 星などを注目してゐる。こうした態度は、アマチュアのみならず、一般の天文家として大に奨めるべきことであつて、絶えず宇宙の各方面に氣を配るといふことは、正に天文學者の義務であると言つて宜いのである。現にカシオペアの γ 星や、馭者の ζ 星等の變光は此ういふ風の注意によつて発見されたものである。

中原君が、どうして1939年の中頃から新星搜索を着手するに至つたか、その動機などについては、日記に殆んど書いてない。しかし、日記の各所に記されてある星への讃辭と、新星への待望と熱心は實に美しい短文となつて現はれてゐる。“Think, now, that a visual nova may appear—for five years have already elapsed since the last one” (1940—1—20) とか、“Believe that my effort is repaid without fail” (1940—2—12) とか、“Indeed, nova-seeking fits me in many respects.” (1940—2—17) とか、Nature never deceives us. A latent hope of meeting with a nova” (1940—2—21) とか、“All things come to him who waits” (1940—3—13) とか、“The first impression seems important in nova-seeking” (1940—3—17) とか、それから又、1942—3—27の頁には“ヘンケが最初の小遊星の発見をしたのは、搜索を決心し開始してから15年たつた時であつた”と記して、自己を勵してゐる。其の他、こうした短文が此所彼所に現はれてゐるのも面白い。

今後、相變らず中原君が毎夕毎曉の天空に新星を搜索せられんことを祈ると共に、こうした努力は、(他にも多くの例がある通り)決して只一人が奮勵してゐるだけでは不充分なのであるから、(第一には天氣の變化、第二には全世界を通じて時刻の變異による見落しなどもあるわけであるから)中原君以外にも尙二三人の新しい熱心家が絶えず天空を見守つて新星発見を努めて貰ひたい。

新星の発見と言つても、“限りの無い話だ”と言へば言へるけれど、去る九月にツキキ氏が発見したやうな、或は一般に望遠鏡でなければ見えないやうな微光の新星は、全く専門家の餘技に訴へるよりほかに、仕方が無いであらう。しかし、肉眼に見えるやうな、殊に今度のやうな一等級や二等級の明るい新星は、決して望遠鏡などは要らないのであつて、只一通りの星座の知識さへあれば、あとは人の忍耐と努力のみによつて成功するものである。この點に於いて、彗

星の発見などよりも遙かにやり易いと言つても宜い。しかるに、かくの如き新星発見が今まで誰にも組織的に行はれなかつたのは、確かに廣い學界の手ぬかりであつたのである。

因みに、今まで、我が日本で発見された新星の表を掲げて見る：

明治34年一月	ペルセウス座新星	0等星	横濱(故)井上四郎氏
大正7年六月8日	鰲座新星	0等星	鳥島にて 山本一清
大正9年八月20日	白鳥座新星	2等星	東京 神田茂氏
昭和11年六月18日	蜥蜴座新星	2等星	北海道にて五味一明氏
昭和11年十月4日	射手座新星	4等星	神戸 岡林滋樹氏
昭和17年十一月11日	鱸座新星	0等星	長崎 中原千秋氏

さきには、戦地に於いて本田實君の新彗星発見のことがあり、今また此の“中原新星”の発見があつて、戦時に際し、國を擧げて死活の大奮闘に従事してゐる時に當り、尙、綽々たる餘裕を示して、天體の新発見が行はれるといふことは、我が國民生活の偉大性を世界に示すに足るものとして、其の功績は賞揚せらるべきものであらう。

こんどの鱸座新星は南赤緯 35° の位置にある星だから、歐洲各地に於いては低く過ぎて殆んど全く見えないわけである。只、米國の南部か、又は南阿、南米、濠洲あたりの天文家たちは、我が日本の天文家と共に、此の星を見得るのであるが、果して彼等が此れを見てゐるか、否か、不明である。これを考へて見ると、我が國の公私の觀測者の責任は重大であると言はねばならない。

▲金澤の會員池亮吉氏から下の如き意見が届いた：

十二月8日といふ書き方について

“我國の天文學界では1942年十二月8日、昭和17年XI月3日といふ様に、月だけは1,2,3を用ひぬ事になつてゐる様である。これは純粹な西洋かぶれである。斷然改めて欲しい。

November 3 だから XI 3 と書き
December 8 だから XII 8 と書く } のは尤である。

もし日本で平常、晦月、如月、彌生——師走といった名前を月の名に使つてゐるのなら同様な書き方をするがよいが、事實はさうでなく、最も合理的に、年も月も日も一樣に數を以て呼んでゐるのだから、月だけは別扱ひにする理由は少しも無いのである。天界第12號の404~405頁だけアラビア數字を使つてゐるのは大變嫌しいが、太文字を使つてゐるのが残念である。”(池 亮吉)

かうした事については、自分は幾度か天界誌上に書いたことであるから、是非それを再讀して貰ひたい。尙ほ、序でに、自分は年月日や時刻の書き方について、例へば

1942年11月25日20時08分^秒13.7

1942—11—25, 20: 08: 13.7

といふ風に書く習慣を有つてゐる。この書き方の便利な點は、例へば此の内の

ホンの一部分のみを書いても、それが、年であるか、月であるか、日であるか、又は、時であるか、分であるか、秒であるかが、一目して明瞭に知られることである。現に—11—25と書けば之れは十一月25日のことであり、1940—と書けば之れは年を表はすこと勿論である。又、28, 12:と書けば之れは28日12時を意味し、:28: 12と書けばこれは28分12秒を表はす。單に:25.3と書いても慣れれば直ぐ之れは25.3の意味であることが知れる。天體の觀測中など、又、其の他いろ々々の研究記録中にも、かうした略記方法によつて便利を獲てゐる所が多い。讀者各位の試みられんことを望むものである。(1942—12—2田上にて)

問 答

問ひ： 昭和18年一月の朔は何日か？ 渡邊敏夫氏著“曆”によれば第8表エバクト表より一月7日朔となつてゐる。然るにカレンダー（本年度分）によれば一月6日朔となつてゐる。右1日の違ひは“曆”によれば有り勝ちの向なるも、カレンダーの6日朔なるは、計算より出したるや、詳細御教示願上ます。(河村生)

答へ： 本年(1943年)は一月6日が朔の日です。その他、二月5日、三月6日、四月5日、五月4日、六月3日、七月2日、八月1日、同31日、九月29日、十月29日、十一月28日、十二月27日が皆朔の日となつてゐます。(P)

問ひ： 平山清次著“曆法と時法”68頁には“復活祭日は三月22日から四月26日の間に動き”とあり、渡邊敏夫著“曆(こよみ)”には“三月22日から四月25日”とあり、何れが正しきや。

答へ： 四月25日の方がよろしい。(C)

問ひ： 荒木俊馬著“天文と宇宙”9頁に、“カルデアの昔には、カペラと言ふ星が、日没に東の地平線から上るのを以て年の始めとした”とあり、“天文”(昭和13年新年號)23頁には“バビロンでは曉方にカペラ(Capella)が東天に見えるのを以て年の始めとし、”とあり、何れが正しきや。

答へ： “天文と宇宙”の記事の方が正しいのです。但し、この時代の一月は秋に始まつたのでした。(Q. S.)

問ひ： “満月”と“十五夜”と“舊曆15日”との差異御教へ下さい。(徳島 F 生)

答へ： 満月とは、月が太陽と正反對の位置になる時刻で、つまり太陽の黄經と月の黄經とが 180° だけ違ふやうになつた時刻です。例へば、これは昨年(昭和17年)九月24日23時24分でした。しかるに新月は九月11日0時53分で、之を舊曆の八月朔(元日)とするのですから、舊15日は九月25日となります。故に“十五夜”は九月25日です。年鑑(天界247號)を見れば、すべて明瞭な筈です。(K)